

## 効率のある指導員活動の課題

食品衛生指導員 今野千栄子 (南相馬市)

指導員委嘱後8年が過ぎましたが、その間乳児を抱えての避難生活が2か年余ありましたので、事実上の活動はこの3か年、微力ながら頑張っております。

相馬地区では、指導員による窓口相談業務年間活動を3部門にわけております。

一つは、食品等検査窓口班 二つ目は、業種別講習会窓口班、この2件については、震災前からの活動でもあり、歴史もあります。

指導員が窓口を担当することにより、指導員の顔ぶれをみなさんに知っていただく、指導員と責任者との関係を密にする対策でした。

年に数回、検査や講習会で面識があると、巡回指導にも会話にも親しみが出来、施設のチェックがしやすい状況になるからです。

3つ目は、今年度から追加した組織が、責任者養成講習会窓口担当班です。27年から公益社団法人福島県食品衛生協会が責任者養成講習会実施機関として指定を受け、各地区別に養成講習会が開催されております。

本日は、この責任者養成講習会について感じた点を少しだけお話させていただきます。

メリットの第1点は講習会の開催日が、HPで公開される事により、受講日が選択できることです。お陰様で受講者も多くなっております。これまでは新規開業者中心の講習会でしたが、巡回指導での責任者未設置施設への受講指導、異動等で責任者の変更が多い事業所へは、頻繁に講習会案内をすることにより、責任者有資格者数を増やすことに努めております。多様化が進む食産業業界では、責任者不在の時の対応としても、第2、第3の責任者予備軍が、必要な時代と感じたからです。

第2点は、当地方は現在県外の営業者の給食施設が多くなっております。施設の多くは、アウトサイダーであり、かつ就労者は全国規模で異動もします。彼らは労働時間も長く、調理師試験受験資格条件を満たしても、取得までには、諸事情もあり難しい状況の方も多くおります。

そこで、福島県在住期間中、生涯役に立つ資格を習得する意義も含め、業種別講習会席上での広報も、受講者増に繋がっているのかと思います。相馬地区の目標は、いつ誰でもが、食品衛生責任者となれる・なれる知識をもたせることです。メリットばかりではありません。課題も多くあります。そのひとつが、年々外国人の受験者が多くなっていることです。この7月の講習会も、10分の1が外国人受講者です。講習会受講に際し、日本語が理解できない場合は、通訳の同伴可として通知しておりますが、彼らは講習会をどこまで理解したが、何を習得したかが疑問となります。

そこで、講習会は、聴覚だけの講習ではなく、視覚で習得することも考えなくてはなりません。幸い日本食品衛生協会では、中国・韓国語版等の食品衛生関係ポスターも頒布しておりますので、これらの資料も活用しております。

ここまでの、私が講習会窓口担当として感じた事です。せっかくいただいた事業ですので、効率ある事業にしていきたいと考えております。

指導員である私たちが、グローバルに対応できる知識の習得、この道のりは、遙か遠くにあります。しかし、「指導員」として指導できる人となるためには、現段階で何ができ

るのか、どこまでが指導なのか、行政と業界の狭間で、非常に微妙な立場であることも理解しなければなりません。

今相馬地区では、一人一人の指導員が、各自目標を持ち、まず自分の力となる資格、知識を習得しようとのことで、震災後各自努力していることがあります。食品の表示の勉強会です。60歳以下の指導員は昨年3ヶ月間猛勉強し、食品表示検定に挑戦し、3級、2級に合格する等、合格率は全国平均を上回りました。又、原発事故を契機として、指導員の中には、放射線取扱者資格まで習得した方もおります。

相馬地区では、食品衛生指導員の定年は75歳とし、卒業生は指導員OB会を結成しております。先輩の指導で学ぶことは、礼儀と人とのコミュニケーションづくりです。先輩の組織があることは、心強いことでもあり学ぶことも多いです。

最後に相双地方の現状になりますが、震災後、組合数は半減、組織離れが加速し、食品衛生に関する情報提供も、組合を通しての手段では周知できない状況です。

食品衛生の高度化が進み、食品衛生管理もHACCPに準じるシステム等の導入、さらに食品の流通には、ハラール等の厳しい輸入輸出制度ができる等、私も食肉を扱うものとして、頭の痛いことばかりです。

未来がある福島県の食品産業に期待し、活気ある社会のニーズにあう指導員活動を見つけられることに、夢を抱いてみます